

# 第1回 山形県屋内スケート施設整備検討会議の概要

## 1 日 時

令和6年6月26日（水）午後3時から午後4時30分まで

## 2 場 所

山形県職員会館 あこや会館 ホール

## 3 出席者

出席者名簿のとおり

## 4 議事概要

### (1) 会長の選出

構成員の互選により、山田浩久氏を会長に選出。

### (2) 説明

事務局から、配付資料に基づき以下について説明。

- ① これまでの経過及び令和4年度屋内スケート施設あり方検討会議報告書の概要について
- ② 令和5年度屋内スケート施設基礎調査の概要について

### (3) 協議

事務局からの説明を踏まえた委員の意見等については、下記のとおり。（発言順）

#### 【井上 圭子 委員】

まずは、今、事務局からの説明もありましたように、非常にお金がかかると言いますか、施設や設備、それから運営するにもお金がかかるということで、こういったことを踏まえた上で、これからの山形県の人口減少なども考えますと、アイスリンクだけではなく、多目的に使える施設がよいのではないかと、思っております。

ただ、通年運用型がよいのか、季節運用型がよいのか、というところに関しましては、資料を拝見しましても、それぞれにメリットとデメリットが両方あるようにしたので、もう少しこちらに関しては検討が必要なのではないかと、思いました。

それから、通年運用型と季節運用型のメリットを合体させることは、設備的に難しいのでしょうか。この点を少し疑問に思ったところです。アイスリンクの上に、バスケットボールなどができる断熱床を敷けるようにすることにプラスして、夏の

間は解氷することはできないのでしょうか。ただし、やはり、持続可能で皆さんから愛していただけるような施設にすることが一番なのではないか、と思いました。

観客席につきましては、500席と1,500席で検討していますが、これから、いろいろなイベントや競技会を誘致することを考えると、やはり500席では若干少ないのではないかと、思います。せっかく造るのであれば、1,000席以上、できれば1,500席以上の固定席を設け、多くの皆様にいろいろなイベントや競技会で使っていただけるようなものにした方が、持続可能なのではないかと、思いました。

また、サブリンクを造るという案もありますけれども、どうしてもサブリンクを造ってしまうと、メインリンクが観客席から少し遠くなってしまわないかと、考えられますので、もちろん、サブリンクと一定の観客席の両方を兼ね備えられれば、とは思いますが、どちらかといえば、観客席を優先して造る方が、私はよいのではないかと、感じました。

それから、設置場所についてですけれども、やはり資料を拝見しても、都市部に造るのが一番よいのではないかと、思っております。さらに山形県は、どうしても車で移動する方が多いので、駐車場をある程度確保できて、さらに公共交通機関の利便性の良い場所、というのが一番理想的なのではないかと、思っています。障がい者の方や高齢者の方、そういった弱者の方も利用しやすい、車の運転ができなくても、利用できるような場所に造るのが一番よいのではないかと、感じました。

例えばですけれども、公共交通機関の利便性を考えて、山形駅周辺について、百貨店がなくなっている状況などもあるので、そういったところに、皆さんから愛される施設を造っていただければ、山形県自体がより活気づくのではないかと考えております。できれば、そういった主要駅から徒歩圏内で行けるような場所ですと一番よいのではないかと、思いました。そうすれば、イベントや競技会があった場合でも、宿泊施設や飲食店への回遊性も生まれると考えられます。そういったところも踏まえると、やはり都市部というのが造る場所としては理想的なのではないかと、思っております。

それから、基礎調査の報告書の31ページのところに、SDGsの視点についてまとめられていました。そこには、ユニバーサルデザインへの対応として、出入口スロープ、点字ブロック、キッズルーム、おやこルームやオムツの交換室などの記載がありますけれども、ここにプラスして、スペシャルオリンピックスの知的障がいをお持ちの親御さんからは、男性でも女性でも利用できるスペースがあると、すごくありがたいと聞きました。どうしても小さいうちですと、女性の着替える場所に連れてきて着替えさせることもできるのですが、やはり大きくなってしまえば、そういうことができなくなるので、男性でも女性でも使えるような、そういったスペースがあると非常にありがたい、と言っておられました。

悪用されることもあるかもしれないので、利用の仕方に関する対策が必要なのではないか、と思いますけれども、子どもをお持ちの親御さんも、お父さんが娘さんを世話する、ということもあるかもしれないので、そういったところも考えると、男性でも女性でも利用できるスペースもあると、非常にありがたい、ということでした。

それから、これだけ費用のかかるスポーツ施設、そして、なぜこのアイススケートリンクの整備なのか、というところに疑問を持つ方もいらっしゃるかとは思いますが、私としましては、このウィンタースポーツの盛んな東北で、公式大会のできる屋内スケートリンクがないのは山形県だけだ、と聞いたことがございます。

そういったことから、せっかく今、スピードスケートなどでも山形県で非常に皆さん頑張っていると思いますので、こういった流れをなくしたくないな、という強い思いがあります。あとは、スケートは高齢者でもできる、それから障がい者の方も利用できる生涯スポーツでもあるな、とっております。ですので、皆さんに利用していただける施設になるのではないかと、思います。

山形県は、最近、文化施設が大変充実してきておりますので、これからは、スポーツ施設にもぜひ目を向けていただいて、この屋内スケート施設整備検討会議を機会に、スポーツ施設の充実も検討いただければと思っております。ベにばな国体以降、もちろん新しくなっているものもありますけれども、いろんなスポーツ施設が今、老朽化で困っているというような意見も聞いたことがございます。この検討会議を機会に、皆様から愛されるスポーツ施設ができれば、と切に願っております。

#### (井上委員の質問に対する(株)パティネレジャー小林氏のコメント)

通年運用型と季節運用型を組み合わせることについて、技術的には難しいことではないと思います。ご要望に応じていろんな施設の整備ができるのですけれども、それにかかる費用を算出した上で、検討することが必要かと思っております。

#### (井上委員の質問に対するクロススポーツマーケティング(株)青島氏のコメント)

通年運用型と季節運用型を組み合わせることについて、技術的な部分ではできるとは思いますが、それに伴う、通年で氷を張った場合の電気代ですとか、そういったものを、今の社会情勢を鑑みながら判断されていくのがよろしいかと思っております。

## 【小原 爽子 委員】

私は、今回から委員として参加させていただくこともありまして、施設とか立地の細かい選択の話の前に、もっとビジョン的なところで、ご意見を紹介させていただければ、と思っています。

まず、基礎調査の報告書を読ませていただくと、本施設について、投資しますと施設整備に40億円から50億円程度かかり、それから運営に伴う設置者負担も、収入を見込んでも数千万円程度かかっていくということで、いずれにせよ、相応の税金投入は避けられない施設になると思います。そうだとすれば、やはり多くの県民が利用する施設になるべきであろう、と思っております。

基礎調査の報告書を拝見しますと、スケートの競技人口がどうしてもまだ少ない状態ということで、利用者数を底上げする、スケート競技者の育成をしていかなければならないのではないかと、と思っています。スケート教室の実施などしながら、ソフト・ハード一体で検討していく必要があるのではないかと、思います。競技人口の拡大については、やはり競技団体と、それから行政も協力して、スケート文化・スケート競技者の育成に取り組まなければならないのではないかと、考えております。実際の施設の整備や管理運営に関しては、民間事業者さんの協力を得ることになるかと思っておりますけれども、事業者さん任せということではなくて、行政や県民の皆様、それから競技団体の皆さんが協力し、連携し合って、よりよい施設を目指していくことが必要ではないかと、と思っております。

それから、資金調達の問題ですが、補助金の活用ですとか、民間からの資金投入など、昨今のスポーツ施設は、なるべく多様な資金調達を目指すというところがございまして、県負担を軽くしていくために、そういったご検討もされてはどうか、と思っております。

施設運営の部分では、収入の向上というのは大変重要かと思うのですが、通常、一般利用の収入だけで収支を大きく向上させていくことは難しいものですから、むやみに一般利用の料金を上げていくことはいかがなものか、と、思っているところがあります。県民、特に子どもや若い世代への負担を重くしても、収入確保の面での効果は限定的となる可能性もあると思います。

また、大きく収入を上げるには、興行利用を増やすということが方法の一つなのですが、けれども、興行を見込むためには、立地も含めた市場性の検討が十分必要でございまして、それから、興行の本格的な開催を想定すると、どうしても整備費は増大傾向にあるかと思っておりますので、興行開催がどの程度見込めるのか、そのためには施設整備の投資がどれくらい必要なのか、両てんびんではないのですが、両方見て可能性を検討していくことが必要かと思っております。

それから、施設整備に伴って駐車場の整備を想定されると思いますが、場所によっては渋滞等の交通問題がありますので、あわせてしっかり検討をされる必要があるのではないか、と考えます。どうしても、駐車場ニーズは高くなると思うのですけれども、1か所に大量に造ることによって、もしかしたら渋滞を引き起こすかもしれませんので、駐車場整備の必要性と交通渋滞の緩和というのは、常に一体で考えないといけない、というところかと思えます。

さらに、昨今のスポーツ施設ですと、それ以外にもいろいろ検討すべき問題があるかと思えます。報告書にもありますけれども、交通アクセス以外にも、例えば、通信環境というのは意外に重要でございまして、例えば興行を開催するときに、昨今のチケットというのは、ペーパーレスになっているかと思うのですけれども、通信がパンクすると、携帯電話でチケットを提示することもできなくなったりして、意外に大変、ということがあります。

このように、通信環境の充実ですとか、それから、近隣エリア内の施設間連携ですね、例えば駐車場一つとっても、施設間で連携すれば、それほどたくさん造る必要はないのかもしれない、といったこともあります。

このほか、多様なプロスポーツやスポーツとの連携という視点もあります。競技団体は、いろいろあるかと思えますが、競技団体が協力されて、なるべくたくさん多くの方がこの施設を使う、それから競技人口を増やしていく、といったところを連携されて取り組んではどうかと思えます。

それ以外にも、防災や健康やインクルーシブ、省エネやゼロカーボン、インバウンドなど、多くの観点がありますけれども、全てを取り組むということではなくて、この施設に本当に必要なものに限定して取り組んでいかれるとよいのではないかと考えております。

とにかく、たくさんの方の県民に資する、本当に県民があつてよかったと思える施設になると一番よいのではないかと、思っております。

#### 【加藤 文子 委員】

一昨年の検討会議にも参加させていただきまして、今回の屋内スケート施設というのは、最初の問題意識として、県内にフィギュア、アイスホッケー等の公式大会が開催できる施設がないということがあり、競技力の向上、そして余暇としてアイススポーツ等、気軽に楽しめる場をつくることで、県民により豊かな体験がもたらされる、ということを狙いとして整備する必要がある、という認識を私としては持っております。

一方で、造るからには、利用者の乏しい施設では持続可能ではないということで、なるべくたくさんの方に利用される施設であってほしいと思います。どれぐらいの利用が見込まれるのか、そして財政負担がどれぐらいになるのかということ、昨年の基礎調査でお調べいただいたということになるかと思いますが、おおよそ整備費で50億円、それから年間の運営費が1億円、利用収入を差し引くと毎年5,000万円程度の財政負担になるというような調査結果かな、と受け止めております。これがどうなのか、これが許容できるのか、ということについては、他と比べてどうかというよりは、まずそれは設置者のスタンス次第ということになるのではないかと思います。ただ、他の60m×30mのアイスリンク等の整備費や運営費と比べて、正直高いな、と捉えておまして、やはり昨今の物価上昇等がかなり反映されていることもあると思いますが、厳しいなという印象も持ったところでございます。

また、今回の集客見込みにつきましては、それほど楽観的な前提によるものではないとは思いますが、これを実現していくためには、やはり施設整備に併せたソフト面での施策というのは当然必要になってくると思います。アイススポーツを振興する取組み、それから、近隣県との連携による競技者の相互利用、また、一般利用者を増やすための多機能化、イベント利用の促進ですとか、季節利用の場合には、他のアクティビティでの利用とか、様々な取組みを検討していく必要がある、ということ、これを改めて基礎調査の報告書を見て思った次第でございませう。

しかしながら、アイススポーツを振興して競技人口の増加につなげていくということは、なかなか地道な取組みになっていく部分だと思いますので、冬のスポーツを支えるために、夏は他のアクティビティで、アイスリンク、スケート施設を十分に活用して、施設を維持していくような仕組みができればよいのではないかと個人的には考えていたところでございませう。

また、基礎調査の中では、その経済波及効果についても算出されておりますけれども、経済波及効果は、消費、投資が増えた分だけ大きくなるというものですので、整備費が大きくなれば経済波及効果も大きくなる、という側面がございませう。もちろん、その地域にそれだけのお金が出るということによる効果はあると思うのですが、その受益者が県外の事業者では、地域内に回るお金、経済効果というものも限られてまいりませう。一昨年も申し上げておりますが、アイスリンクの運営や補修に係るノウハウを持った方というのは、県内には乏しいわけで、県外事業者の力を借りることは前提になると思うのですが、これを契機にして、地元のスポーツ施設全般の運営を担う事業の育成や、人材の育成ということ、長期的な観点で実施していくということも、地域の公共サービスの提供という観点からは重要ではないかと考えているところでございませう。

## 【菅間 裕晃 委員】

私は今回から、ということなので、そもそも論になってしまうこともあるかもしれませんが、話をさせていただきたいと思います。山形県は雪国ですが、公式大会が開催できる屋内のスケート施設がないということで、スポーツ協会としても課題と捉えており、競技団体からの要望も多くございます。ただ、やはり施設があれば、もちろんよいわけですが、それをどのように維持して、県民にとって効果的なものにしていくか、という視点が重要だと考えております。施設ができれば、競技団体にとってはよい。ただし、今回の資料にもございますように、競技人口というのは、何十人、百人そういった単位です。その競技団体の人たちの利用のみによって、運営が成り立つわけではありませんし、民間の施設が平成29年に閉鎖に追い込まれたということを考えても、持続可能なものにしていくためには、相当の努力をしなければいけないだろうと考えています。

ただ一方で、令和元年度に県教育委員会で県立図書館をリニューアルしたわけですが、それによって図書館の滞在の仕方というのが、少し変わったという印象を持っています。県立図書館のリニューアル前は、本を借りに来る人、返しに行く人、というのがほとんどだったわけですが、少し趣を変えたことによって、滞在時間が長くなって、例えば、その中のレストランに来たり、コーヒーを飲みながら読書したりするなど、滞在型の人が増えた、ということがあります。それをどうにかして周りに普及して、近くを回ってもらえるような回遊型の施設にできないか、ということ地域と連携しながら模索しました。それがどこまでうまくいっているかという、なかなか完全ではないわけですが、そういった拠点にするということも含めて、こういった施設をこれだけ多額の予算をかけて造るときには、覚悟を持って考えなければいけないのだろうな、と思います。

ですから、競技団体の協力、スケート教室の開催はもちろんです。どうやったら山形にスケート熱を起こせるだろうか、というようなことも含めて考えていけない、やはり、造って終わり、という施設には決してしてはいけないのだろうな、と思っています。

一方で、教育委員会に勤めていた経験から申し上げますと、国の調査によりますと、本県の児童生徒は、体格的には優位にあることは、ご承知の方も多いかと思うのですが、その割に運動能力としてはさほど伴っていない、必ずしも優位にはない状況にあります。それを、スポーツ担当の方に分析してもらると、やはり冬場の過ごし方による影響が大きいようです。スポーツテストというのは、春先、4月、5月にあるものですから、冬場はやはり家に閉じこもっている期間が長いので、運動不足によって、肥満傾向になるお子さんがいて、運動嫌いにつながり、それによって体力低下を招く、といった悪循環になっているという傾向もあります。

雪国なのに、冬場の体力づくりというのはいままで聞いていないのです。雪国といえばスキーなわけですが、スキーというのはなかなか初期投資においてハードルが高く、気軽に取り組むというわけにはいきません。そういった点では、スケートが、冬場の運動不足を解消する一つの方策ではあるのかなと思います。冬場、「みんなで体を動かしましょう。」という象徴的なものにしていくことができれば、効果的なものにできるのではないかと、思っています。これは、児童生徒だけではなくて、一昨年度の「あり方検討会議」の資料を見させていただいたら、大人も全国平均よりもスポーツの参加率が低い、というようなデータもあります。そういったところの解決にもつなげていければ、と、思っています。

また、魅力的な施設、核となる施設を一つ造ることによって、子育て環境や満足度というのを向上させていく、という、行政にとっても意欲的な施設にしていただければ、と、思っています。そういったことを考えていくと、例えば、通年運用型か季節運用型か、ということについて、やはり県内一つの施設であるとすれば、単純に季節運用型と割り切ってしまうより、多少、ランニングコストがかかるということはあるようですが、通年運用型で夏場でも必要に応じて使えるようにすることも、検討してよいのではないかと、思っています。

観客席に関しても、基礎調査の資料を見ると、興行利用の日数を増やすことは、それほど簡単ではない、ということはおわかりですが、「1,500席あればよかった。」というようになってから造ることが非常に大変だとすれば、より多機能型にするためには、観客席を増やすことを考えてもよいのではないかと、思っています。財政負担をどれだけ真剣に考えられるかですが、そこは造るからには、きちんとしたものを造っていただきたいと、思っています。

夏場の体育館利用ということで言えば、やはり、体育館を使いたい、という需要は結構あるのだと思います。ですから、そういったことも含めて、魅力ある施設として造っていければな、と、思っているところです。

#### 【益満環 委員】

私自身、ソフトテニスの指導者をしていまして、ボランティアで子どもたち、小学生を毎年40人ぐらい指導しています。私の生まれ故郷が大曲なものですから、そこで指導しているのですけども、山形県でとにかく試合が多い、というのが私の印象です。例えば酒田市内だったり、山形市内のテニスコートだったり、かなりよい施設があるな、というのが本当に第一印象です。

今回、アイススケート場を造る検討ということで、実は私、宮城県に6年前まで住んでいました。宮城県には、仙台市内だけではなくて、石巻にもアイススケート

場がありますが、ほとんどが確か民間だけでやっていると思います。今回の基礎調査の結果では、山形県の財政負担もあるということで、まずそれに関して、どの程度なのか、ということをお聞きしたかったです。私も、宮城県で、スケート場を子どもと一緒に結構利用したものですから、もしかしたら、元々の人口や利用者、スポーツ人口が違うのかもしれませんが、民間主導ではできないのかどうか、という点は聞きたかったところがあります。

それと、私、秋田県のいろいろと施設の評価の仕事をさせていただいた中で、秋田県では、もう廃止すべき、という施設がかなりありまして、特に温泉が多数存在しますから、公的な温泉保養施設というのは、かなりあります。何でもかんでも潰せばよい、何でもかんでも造ればよい、ということではないですけれども、お金がかかっても必要な、それこそウェルビーイングのためには必要な施設もありますので、そのような点をよくわきまえた上で、造るか、又は造らないか、という議論が必要だと思います。

やはり山形県の施設ですので、山形県の皆さんが納得しなければ、造っても駄目なわけです。パブリックコメントをしっかりとらないと、後で、「だから言ったではないか。」という話になるので、パブリックコメントをきちんと実施することは、大事だと思います。また、スケート競技の恩恵を受けない方というのも、もちろんいらっしゃいますので、そういった方々にとっても利益のある施設になっていただきたいな、と考えています。ですので、やはりアイススケートだけではなくて、他のスポーツも存分にできる施設になっていただきたいな、と思います。

このほか、山形市さんは大学をたくさん抱えられているので、若者も多いですから、フェスなどもよいと思います。秋田県の由利本荘市には、ナイスアリーナというところがあって、年に数日、「ディズニーオンアイス」が開催される施設です。そこでは、私のようなテニス競技者も、夏も冬も利用できますし、あと一番よいな、と思うのは、日本海側に面している大きな施設で、防災拠点としても活用できます。このように、スポーツをする人だけではなくて、いろんな方々に恩恵があるような施設になっていただきたいな、と思っております。

#### (益満委員の質問に対する事務局からの回答)

今回お配りした資料3の2ページにおいて、「②単年度の利用見込み、施設利用収入、設置者負担等について」とありますが、この設置者負担がある見込みである、という部分について、民間の言葉では赤字ということになってしまうのかな、と思います。

先ほど小原委員から、「今回の基礎調査の結果は、税金の投入はやむを得ない、

というデータではないか。」というご発言がありましたけれども、我々も、民間のプロのマーケティング会社の方からレポートを作っていた結果として、そういう受け止めをしております。

#### 【細谷 尚寿 委員】

私からは、競技力の向上、そして、学校教育という立場で話をさせていただきたいと思います。

スキーやスケートといった冬季スポーツは、山形県のお家芸的な競技でございます。今年の国民スポーツ大会では、天皇杯得点で、スケート117点、そして、地元開催となったスキーは102.5点、合計219.5点を獲得して、今のところ全国第3位につけているという状況です。スケート競技、中でもスピードスケート競技になりますけれども、皆さんご承知のとおり、2010年、バンクーバーオリンピックで加藤条治選手が500m銅メダル、そして2022年、北京オリンピックで森重航選手が500m銅メダルということで、本当に山形県としても、他の競技をリードするような位置にいる競技だな、と思っているところです。

そうした中で、本県の中学・高校で、スピードスケート部を有している学校は、私のところの山形中央高校のみという状況です。屋内リンクが整備されれば、オールシーズンで氷上練習ができるということで非常にありがたいし、活躍の場がもっと広がっていくということが予想されます。今の状況を申し上げますと、11月後半から2月末まで、スケート部は、山形市落合の市総合スポーツセンタースケート場で練習をします。その3か月間、大会以外では、ほぼフルで落合のスケート場で練習をする、という状況です。屋内スケート場が整備されれば、オフシーズン期間とはいえ、3月から10月の8か月間、氷上で練習できるということで、月10回程度は氷上練習が可能になると思います。具体的に言うと、ショートトラックでコーナーワークに特化したトレーニングができる、という利点があるな、と思っております。

先ほど課題としてありました、屋内スケート場の利用促進、競技人口をどのように増加していけばよいのか、ということですが、資料の17ページの図表2-2に、県内既存スケート施設へのヒアリング結果が記載されております。

この中で、山形市内の小学校在7校から8校、スケート授業を実施しているということですが、山形市内の小学校在37校あります。このうち7校から8校です。中学校は16校ある中で、スケートを実施しているところは、なし。高校については、村山地区（東学区）で15校あるうち、4校から5校とありますが、全ての生徒がスケート授業を実施しているのは、山形南高校だけだと思われます。やはり、この児童・生徒、また、先ほど山川委員からありました、小さなキッズですね、そのあた

りも含めて利用拡大をしていくには、体育の授業として、各学校がカリキュラムとして入れていく必要があると思います。それをするにはどうしたらよいか、ということになるわけですが、やはり、行政からの何らかの指導、補助が必要になってくると思われます。

具体的には、やはりバス代の補助であるとか、あとは指導員の確保ですね。その部分については、競技団体をお願いすることになるのでしょうかけれども、山形南高校で私が体育の教員したときには、私達教員が全生徒を教えるという指導体制でした。やはり、それでは今の時代、無理がありますよね。ですので、指導者の確保というの、重要な課題になってくるのではないかと、思います。

また、立地条件についてですけれども、委員の皆様が言われているとおり、車を持たなくても、公共交通機関を利用すれば歩いても行けるような、子どもたちでもアクセスしやすいところで、村山地区の都市部のように、社交場となり得る、若者が集ってその拠点となるような、そのような場所を目指していくべきではないか、と思っております。

観客席については、多機能型ということを考えてみると、私、高体連会長という立場で、高校体育連盟のスポーツ大会が、どれぐらいの観客席が必要なのかということ考えたときに、例えば、バスケットボールの県ウインターカップ予選、そしてバレーボールの春高バレーの県予選などは、最低でも1,500席ぐらいのキャパシティは必要であろうと思います。コンパクトな中にも、1,500人ぐらいの観客が入れば、相当盛り上がった大会運営が可能になると思っております。

#### 【山川 唯美 委員】

私は、2年前の会議から参加をさせていただいております。2年前も、コミュニティの中でこういった会議に参加する、という旨を共有しまして、メンバーから意見を募った経緯があるのですけれども、それから1年間、基礎調査に入った段階でコミュニティのメンバーに会うと、「あの会議のことどうなった？」と聞かれるほど、子育てしている皆さんは興味を持っていることなのかな、と感じていたところです。

この2年間の間に、私は少し個人的なことですけれども、1人出産をしまして、子ども2人になったのですけれども、そういったところからも、自分の子どもにこの山形県を好きでいてほしいですし、スケートというものを知らないまま育っていくのかな、というように、私もこの会議に参加しながら、いろんなことを想像したのですけれども、自分の子どもたちが大きくなる時に、「スケートって楽しいんだよ。」とか「やったことあるよ。」とか、そういったことを話ができるような子どもたちになるといいな、と、思っていたところです。

ただ、この去年の基礎調査の結果を見たところ、やはり経費の部分で、かなり負担がかかるのかな、というところで、子どもたちにそういったものを残したい一方で、子どもたちが大きくなって、こちらに住んでいるときに、その財政的な負担、県税の負担がかかってくるのかな、自分自身にもかかってくるのかな、というところが、少し不安なところではあります。

今まで皆さんのお話をお聞きしても、全てそうだな、そうだな、というふうに納得していたところなのですけれども、益満委員が先ほどおっしゃっていた、私も中学・高校と、ソフトテニスをやっている、全国各地の大会に行くぐらい、頑張っているのですけれども、そういったスケート以外の活用の仕方、屋内競技の練習場としての活用の仕方というところも、総合的に考えていけないのではないか、と思っています。

全国各地、やはり大会などで行ったところというのは、子どものときに行ったことが今思い出になっていて、またその地に行ってみたい、観光として行ってみたい、「ここで頑張ったんだよね。」というように、自分の中でも思い出になっているものがあるので、屋内スケート施設ができて複合的な利用ができるようになれば、他県の方が山形にいらっしゃって、大会なり遊びに来るなり思い出を作って、またこちらにIターンとか移住とかそういった形で戻ってくる、ということも考えられるのかな、というように、お話をお聞きして思っていたところです。

あとは、井上委員が最初にお話していた、パターンA、パターンBもどちらにも対応できるような施設のあり方というのがよいのではないかと、と思っています。また、山形でせっかく造るのであれば、どこかにある施設と同じものを造るのではなくて、山形に行く理由になるような、山形のブランディングにつながるような、唯一無二の魅力的な施設を造れたらよいのではないかと、思います。そうすれば、自信を持って「山形っていいとこだよ。」と言えるかな、と一県民としては思ったところです。

## 【山田 浩久 会長】

今の時点で集約できることとしては、競技とレクリエーション、その両方を両立させなければいけないというテーマがある、ということです。

これから、それらをどういう形で両立させるか、という部分を詰めていかなければいけないと思いますが、一般的には、「まずビジョンを立てましょう。」ということになると思います。言霊ではありませんけれども、実際に文章で、「こういう未来を我々は想定しているんだ。」ということを設定する、いわゆるビジョンですが、建築家の人があるビジョンを見てパースが書けるようなものが本来のビジョンで、施

設の目的のようなものではなくて、本当に文章を見て、思い描くことができるようなものを、まず立てていく必要があるのではないかと思います。

それから、今回、基礎調査で利用者数の見込みが出されていますが、私の試算で考えると、あと倍、要と思います。利用者が年間12万入れば、運営していけるのではないかと考えておりましたが、専門業者の方の試算では6万人強ということですから、およそ2倍の利用者数が必要だと思います。

その差の部分について、このままいくと税金の投入、という形になるのでしょうかけれども、こういうときに考えられるのがプラスアルファの価値、という部分で、先ほどファイナンスの話が出ましたが、足りない部分をどこからか持ってくる、あるいは両立以外に、この施設から今まで考えていなかったような価値を見いだしていく、というような考え方が必要になってくると思われまます。

足りない部分をお金で補填するか、あるいは、もう少し違う、先ほど山川委員がおっしゃっていましたが、山形県を代表するような唯一無二のものを造る、というような部分で補うか、ということです。

山形県の宣伝塔のようなものを造って、山形県のプロモーション宣伝費を足りない部分のお金に充てると、6万人の利用者でも、残り半分の部分を別の予算を回して、この施設の運用に充てる、という考え方が出てくるのではないかと、思います。

いずれにしても、1回目ではありますけれども、この会議でこれから考えなければいけない点が、だいぶ整理されたのではないかと、考えております。

## 5 その他

次回以降の会議の開催時期や開催内容については、今後調整していくこととした。

以 上